

バライロウラベニイロガワリ中毒記

大作 晃一

バライロウラベニイロガワリ *Boletus rhodocarpus* は、高橋春樹さんが2001年に新種発表したきのこです。学研の日本の毒きのこ（本誌35ページで紹介）に紹介されています。私は何度か、富士山のモミ類の樹下で見かけることがありました。そして、2001年8月19日の富士山で、不運にもこのきのこで中毒してしまいました。きのこ中毒初体験です。

前日から、吹春さんや山岡シェフたちと富士山で宿泊。すがすがしい朝をむかえ、たっぷり朝食をとったあと、車の中でバライロウラベニイロガワリの白バック写真の撮影を開始。このときは、バライロウラベニイロガワリとは知らず不明種扱い。セオリー通り、味と香りを記録することに。親指の爪の大きさほどの生の肉を口の中に放りこみ味見。うまい！このきのこでパスタを作りたいと思いながら、そのまま飲み込んでしまったのが大きなまちがい。

ツキヨタケの撮影中に吐いた

そのあと、きのこを探しに山の中へ。何事もないように歩き続ける。夕方になって、山から出てくるとなぜだか不快な気分。林道から少し入ったブナの大木にツキヨタケが生えていたので撮影することに。さらに気分が悪くなってきた。撮影中に吐いた。理由がわからない。食べ過ぎか？確かにきのうから、山岡シェフの料理を腹いっぱい食べた。それとも、ツキヨタケの胞子を吸って中毒するのだろうかとも真剣に考えた。

考えたすえに、午前中に味見をしたきのこに思い当たった。他に考えられない。ドクヤマドリとかサタヌスとか、イグチだって毒きのこがあるじゃないか。でも、あんな少量で。



これにつくきバライロウラベニイロガワリ

数回吐いて、すでに胃の中は空っぽのはず。不快感というよりも、胃の激痛に変わっていた。みんなには先に帰ってもらい、一人でのんびりと帰ることに。激痛に耐えかねてパーキング毎に休憩。数回、仮眠をとったりしながら、なんとか帰宅。

そう言えば下痢はしなかった。腹いっぱい食事をしたあとだったので、きのこが胃の中に滞在する時間がながくなって、胃が集中的にダメージを受けたのかなと想像してみた。胃の内壁全体が炎症しているような感じだ。興味本位に、一度くらいはきのこ中毒を体験したいなと考えたことはあったが、実際はなかなかつらいものだ。やるもんじゃないな。

翌朝、ピークは過ぎて、だいぶ楽になったけれど胃の炎症はおさまっていない。朝食は食べる気になれなかったが普通に生活した。昼は森林総研の服部さんを訪ねて、一緒に昼食をとった。孔口の赤いイグチを生食するなんて最も危険な行為だなどとひと通りばかにされた。コーナーのイグチのモノグラフを借りて帰った。胃の炎症感はずっと続いたが、その後はなんともなかった。20p2